

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 **黎**



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0038号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成19年6月27日

「イオウジマ」から「硫黄島」へ…英霊に一杯の冷たい水を捧げん。



島名変更は主権国家に帰属

去る六月十八日、国土地理院が大東亜戦争の激戦地、硫黄島（東京都小笠原村）の呼称を「イオウジマ」から島民が昔から呼んでいた「いおうとう」に戻したことで米国内が騒々しいようである。米国では「イオウジマ」の名が大東亜戦争の勝利を象徴する地名として定着しているため、国土地理院が呼称を元に戻したことをめぐり、「日本が歴史を書き換えた」などと奇妙奇天烈なことを言い出す輩まで出てきた。これでは特定アジアの難癖と同じ論法である。

土地の名称の変更権は当該地を領土とする主権国家に帰属するということである。これは世界の常識であり、それを「歴史の書き換え」とは片腹痛いことだ。

はずれた米軍の思惑

一九四四年（昭和十九年）夏マリアナ諸島を攻略した米軍は、十一月からB-29による日本本土への長距離爆撃を始めた。航路の中間点にある硫黄島は米軍にとって、どうしても攻略したい重要な島であった。作戦開始を間近に控えた一九四五年二月十六日、作戦の指揮官であるスミス中将は「硫黄島の攻略予定は五日間」と豪語した。事実米軍の圧倒的な物量による先制攻撃は凄まじいものがあった。米軍が硫黄島に投じた爆弾は七百トン、砲弾は五千トンにもおよび、ついに二月十九日、

米軍は上陸を開始した。しかし、ここから日本軍の反撃が始まった。硫黄島の地下には栗林中将の発案により地下壕が網の目のように構築され、その中には米軍の激しい先制攻撃に耐えた日本軍が米軍の上陸を今や遅しと待ち構えていたのだ。米軍の目算では五日間で終わる筈だった戦闘は、三月二十六日まで続き、その結果米軍は甚大な損害を被ることとなった。

日本本土への米軍の無差別爆撃は、非武装の民間人を標的としたもので、明らかに国際法に反するものであった。戦前の渡米経験から、米軍と米軍の空爆の凄まじさを知り尽くしていた栗林中将は、本土侵攻を一日でも遅らせたい、日本にいる同胞の平安を一日でも長く保ちたい、との思いを強く抱いた。

栗林中将の的確な判断

この決戦の前年に父島に赴した栗林中将は戦況を詳細に分析し、米軍は必ず硫黄島に侵攻するとの判断に至った。当時は無防備に等しかった硫黄島へ司令部と師団を移し、制空権と制海権をほぼ手中に収めていた米軍に対し、硫黄島を防戦の拠点と定め、島の要塞化に努めた。

どうすれば米軍の侵攻を遅らせることができるのか、それは米国の思惑を覆す、島の

要塞化」であった。栗林中将と士気上がる日本兵が可能な限りの努力を尽くして徹底的な持久抗戦を敢行したのである。この大規模な地下要塞の構築と戦力の合理的な配置、そして何よりも日本軍の不屈の精神によって、補給が途絶えた中、三倍の物量を誇る米軍に異例の大打撃を加え、本土進攻を遅らせたのであった。

本部玉砕後も続いた戦闘

地下壕の中は火山熱により想像を絶する暑さだった。すでに補給は途絶え、食糧も水も底を尽いた極限状態の中、日本兵は闘ったのである。そして、ついに栗林中将は東京の大本営へ「戦局遂二最期ノ関頭二直面セリ」二十六日夜半二期シ、小官自ラ陣頭二立チ全員壮烈ナル攻撃ヲ敢行スル。敵来攻以来麾下（きか）將兵ノ敢闘八真二鬼神ヲ哭カシムルモノアリ。只管皇國ノ必勝ト安泰ヲ祈念シツツ、永久ニ御別レヲ申シアグル」と訣別の電報を打電した。三月二十六日栗林中将以下、数百名の勇士は米軍基地へ総攻撃をかけ玉砕した。しかし島北部の残存兵による抗戦は六月末まで続いたのである。日本兵の戦死者は二万二千九百九十三名、生存者はわずかに千三百三名であった。一方、米軍の戦死者は六千八百二十一名、負傷者は二万八千六百五十五名

にものぼり、硫黄島の攻防が希に見る壮絶な戦いであったことを物語っている。そして今もなお、硫黄島には一万三千の英霊を迎えを待っている。耳を澄ませば勇戦奮闘の末戦死なされた方々の靈魂の叫びが聞こえてくる。



栗林忠道中将

御英霊に捧げん、一杯の水を
独立総合研究所代表の青山繁晴氏によると、硫黄島の兵士たちは、米軍による本土への空襲が、日本の軍需施設を爆撃する為のものではなく、非戦闘員である一般国民を殺戮することを目的としていることを知り、本土の国民の命が奪われることを防ごうと、地下壕を掘って立て籠もり少しでも長く戦おうと硫黄島を死守していたそうである。

また青山氏は、我々国民の一人一人が、我々を守る為に死闘の限りを尽くして斃れ給もつた御英霊の方々に、一杯の冷たい水を供えて硫黄島に思いを馳せて欲しい。やがてそれが遺骨収集の国民運動になって欲しいと願っているそうだが全く同感である。なおすべてが尽きた中で、なお

祖国・日本を思い、国民を守らんと死力を尽くした兵士たちは、地獄のような暑さと飢えと渴きとも闘っていたのである。六十二年の時を超え、場所を超え「一杯の水」を捧げる。この心をいつまでも持ち続けていきたいものである。

勇士たちは「冷えた一杯の水」をどれほど口にしたかったとか。その思いに敬意を捧げ生きていることへの感謝を捧げ、そして一杯の水を捧げる。かけがえのない命と引き換

えに国を守ってください。先人があればこそ、現代日本が存在するのだ。日本人として生まれ、日本で育ち、日本で生きて来た。無数の先人が尊い命と引き換えに守ってくださった日本があればこそ、今の自分自身の存在がある。

先人に敬意と感謝を捧げる。そのごく自然な感情が、日本人の尊厳と誇りの底流にあるべきだと心から思う。

平成十九年六月二十四日
編集人・戸出蒼流

キャッチコピーは「成長を実感に！」



最近エコという言葉をよく耳にするが、正確にはエコロジ（環境保護）というらしい。まさかエコやエコと間違えるようなそそっかしい御仁は、小紙の読者諸兄にはいないと思うが筆者は少し前まで

エコノミー（経済・節約）と勘違いしていた。国会のセンターの方がクールビズと称する似合いもしないファッションで「見た目にも涼しいし、冷房費も節約できて、一石二鳥だ」などと悦に入っている。着ているものは涼しげかも知れないが、オッサンのギラついた顔を何とかしろ、オバサンの厚化粧を何とかしろ、見ている当方は暑苦しくて堪らない。あの顔を見ると、冷房費を節約できるところかエアコンの温度を下げてしまおう。

永田町の住民と一般国民の意識格差は拡大する一方である。そんな中、自民党が参院選に向けたポスターを発表した。キャッチコピーは「成長を実感に！」ということのよう

だ。広報局長の片山さつきによると、「エコを感じさせるスタイル」だという。この女のニタリ顔を見ると、ゾツとして背筋が寒くなり、思わずエアコンを切ってしまうくなるので皮肉なことにエコに繋がる。

自民党のサイトによると、「成長を実感に！」は改革の成果を国民一人一人が暮らしの中で実感できるよう、改革を貫徹していく我が党の強い決意をストレートに表現している」と自画自賛している。そもそもポスターというものはあくまでもイメージによる訴求である。党の都合の良いように作成し、それを見た人への好印象を与えれば、ポスターの使命は充分果たしたと言えるだろう。しかし、いくらポスターの出来が良くても政権与党のコンセプトや思想が現実と乖離していたのでは国民に虚しさを与えるだけである。

このポスターは全国に二十四万枚を掲示するそうだが、二十四万枚といえればかなりの刷数である。片山さつきは、「エコを感じさせる」と言うが、使用済みのポスターは、どうするのだろうか、まさかA4に切つてメモ用紙にするだけでも言うのだろうか、エコを論じるならその程度のことをやってから、ものを言えと言ってやりたい。

梅雨空の知覧特攻平和会館



今月四日、梅雨入りしたばかりの鹿児島を訪れた。

過密スケジュールの合間を縫って知覧の特攻平和会館まで足を伸ばした。この記念館は大東亜戦争の末期の沖繩決戦に、国を思い、父母を思い、祖国日本の永遠の平和と繁栄願いながら華と散った陸軍特別攻撃隊員の遺影、遺品、記録等を展示している。現し身は八重の潮路に果つるとも

永久に護らん千代の栄を
出陣を前に仲間たちと談笑する少年兵の遺影や手記は、涙無しには見られない。果てしなく広がる将来に大きな夢を描きながら尊い命を国に捧げた少年兵たち。偉大なる先人たちに心からの感謝と哀悼の誠を捧げ記念館をあとにした。私の頬を濡らしたのは梅雨のはしりの雨だけではない。

編集人・戸出蒼流